

## — 連 載 —



あのマチ・地域おこし活躍中  
このムラ

### 鶴居村の事例

— 多様な組織による地域農業振興 —

No60

#### 1・鶴居村・JAくしろ丹頂管内の農業の特徴

鶴居村はその名のとおりにタンチョウが居る村として有名である。かつてタンチョウは絶滅寸前の状態にあり、一九五三年に国の天然記念物、一九五二年に国の特別天然記念物に相次いで指定されたが、鶴居村では一九

五二年から始まった村民による給餌活動、一九八七年に設置された日本野鳥の会が運営する「鶴居・伊藤サンクチュアリ」などの効果があらわれ、現在、その生息数はおよそ一、三〇〇羽まで回復している。タンチョウ見物を目的とした来訪者は多く、鶴見台や音羽橋などのタンチョウ・ビューポイントをはじめ、湿原散策の起点となる温根内ビジターセンター、乗馬が楽





どさんこ牧場(正面柵内に馬がいる)



鉦路丹頂農業協同組合

しめるどさんこ牧場、温泉ホテル、ゴルフ場などといった観光施設が村内に点在するなど、本村は観光業が盛んな村であるといえるが、村の第一の基幹産業は、あくまでも農業、就中、酪農である。

その振興の拠点となるのが、

二〇〇六年に村内の鶴居村農協と幌呂農協、近隣の白糠町農協と音別町農協の四農協が合併して誕生したJ Aくしろ丹頂である。その中でも旧鶴居村農協管内(以下、鶴居管内と記す)は、離農の増加テンポが緩やかであり(二〇〇六年を一〇〇とした乳牛飼養頭数は二〇〇六年の六、

二〇〇九年の組合員数の増減率は鉦路管内平均九一・七%、鶴居管内九七・九%)、それゆえに耕地面積や乳牛飼養頭数が維持される傾向にある(耕地面積は二〇〇六年の四、四一一haから二〇一〇年の四、六五〇haへ、

鶴居管内は農業者が機械の共同利用を重用する傾向にあり、

機械共同利用組合

2. 鶴居管内における農業支援システム及び多様な担い手の実態

八四六頭から二〇一〇年の七、〇九五頭へそれぞれ増加)。その背景にあるのが、農家経営を支援する様々なシステムの構築、ならびに複数戸からなる農業生産法人の設立であった。以下では、現在、鶴居管内で機能している支援システムや農業生産法人に代表される多様な担い手を紹介し、その意義について考察してみたい。



全酪連幌呂SP飼料倉庫

管内全域に牧草収穫で使用する大型機械の共同利用組合が設置されている。これらは一九六八年に構造改善事業を活用して農業者が設立したもので、当初その数は一〇組織であった。その後、一部で組織再編が行われ、現在は九組織となっている。管内の農業者のほとんどがこれに参加しており、参加していないのは、後述する農業生産法人の構成員と育成專業農家のみとなる。

九組織は下雪裡、中雪裡、中雪裡南、茂雪裡、茂雪裡下、茂雪裡上、支雪裡、下久著呂、中久著呂の各組合からなり、うち中雪裡南と茂雪裡下を除く七組織は大型ハーベスターを導入している。また、構成員の出役のみによる運営を行っているのは、茂雪裡、茂雪裡下、茂雪裡上、下久著呂、中久著呂の五組織に限定されており、その他の四組織は、専任オペレータを雇用し、構成員以外の労働力を活用している。専任オペレータを雇用する理由は組織によって様々であるが、その主たる要因は、経営規模格差の進行に伴いアンバランスになった構成員の出役時間を調整するためではないかと考えられる。

なお、隣接する幌呂管内にも、一九七四年に構造改善事業を活用して設立された機械共同利用組合が九組織存在していた。し

雪裡南、茂雪裡、茂雪裡下、茂雪裡上、支雪裡、下久著呂、中久著呂の各組合からなり、うち中雪裡南と茂雪裡下を除く七組織は大型ハーベスターを導入している。また、構成員の出役のみによる運営を行っているのは、茂雪裡、茂雪裡下、茂雪裡上、下久著呂、中久著呂の五組織に限定されており、その他の四組織は、専任オペレータを雇用し、構成員以外の労働力を活用している。専任オペレータを雇用する理由は組織によって様々であるが、その主たる要因は、経営規模格差の進行に伴いアンバランスになった構成員の出役時間を調整するためではないかと考えられる。

一九七四年に構造改善事業を活用して設立された機械共同利用組合が九組織存在していた。し

雪裡南、茂雪裡、茂雪裡下、茂雪裡上、支雪裡、下久著呂、中久著呂の各組合からなり、うち中雪裡南と茂雪裡下を除く七組織は大型ハーベスターを導入している。また、構成員の出役のみによる運営を行っているのは、茂雪裡、茂雪裡下、茂雪裡上、下久著呂、中久著呂の五組織に限定されており、その他の四組織は、専任オペレータを雇用し、構成員以外の労働力を活用している。専任オペレータを雇用する理由は組織によって様々であるが、その主たる要因は、経営規模格差の進行に伴いアンバランスになった構成員の出役時間を調整するためではないかと考えられる。

## 複数戸からなる農業生産法人

機械利用組合同様、構造改善事業等を活用して設立された複数戸からなる農業生産法人が鶴居村には三組織ある。一九六四年設立の農事組合法人清和農場、同じく一九六四年設立の有限会社協栄農場、一九七〇年設立の有限会社鈴木農場がそれである。これらのうち鶴居管内に属するのは清和農場であり、他の二組織は幌呂管内の所屬となる。

清和農場は十一名の構成員からなる大規模酪農経営で、その耕地面積は三五〇ha、乳牛飼養頭数は六〇〇頭以上に及ぶ。北海道農業開発公社が実施主体となる農業生産法人出資育成事業を活用しており、それを通じて経営規模の拡大や農地の集積を

実現するだけでなく、担い手のいない農地の維持にも貢献している。

その後、暫くは法人の新設がなかったが、九〇年代以降、多様な担い手の一つとして農業生産法人が注目されるようになる

と、一九九五年設立の有限会社トミーランドを皮切りに、二〇〇一年設立の有限会社鶴翔、二〇〇六年設立の有限会社クレイ

ランドTMRセンターといった三つの法人が次々と誕生した。これらのうち鶴居管内に属するのはトミーランドとクレイランドTMRセンターの二組織であり、鶴翔は幌呂管内の所屬となる。

トミーランドは、前述した下雪裡の機械共同利用組合に属していた六人のメンバーが独立して設立した農業生産法人である。その設立の後押しをしたのは、

協業に関心を持つ六人のメンバーに経営指導を行ってきた農協のスタッフである。耕地面積二八〇ha、乳牛飼養頭数六〇〇頭以上に及ぶ大規模酪農経営であるが、経営内容は酪農だけに留まらず、就農を希望する参入者を対象にした研修も行っている。

クレイランドTMRセンターは、下久著呂地区に属する五戸の農家が、労働力の負担軽減、高性能大型機械の共有によるコスト削減と作業の効率化、それに伴う良質飼料の生産を実現するために設立した農業生産



釧路丹頂農業協同組合 哺育・育成センター牧場

法人である。飼料給餌と機械作業は共同で行うが、搾乳は各構成員が独自に行うため、部分協業経営となっている。トミールンド同様、資金計画の策定をはじめ、ここでも法人設立時に農協が様々なサポートを行っている。

### 育成牧場

現在、村内には、農協夏期放牧場、農協育成牧場、農協哺育育成センター、村営鶴居牧野といった四つの育成牧場が開設されている。これらの概要は次のとおりである。

若牛及び初妊牛の夏期受託放牧と牧草生産を行う農協夏期放牧場は、当時の鶴居村農協によつて一九七二年に開設された。後述する村営鶴居牧野も夏期放牧を行っているが、こちらは種

付前の牛の放牧とその人工授精を目的としているため、両者が受委託をめぐつて競合する関係にはない。放牧期間は五月下旬から十月下旬まで、預託料は一日一頭当たり二三〇円であり、年間受託頭数は七〇頭前後で推移している。なお、前述したように、本牧場は牧草生産にも取り組んでいるが、これは販売目的ではなく、次にみる育成牧場と哺育育成センターで使用する牧草を提供するために行われているものである。

農協育成牧場は、一九七五年に当時の幌呂農協が設立した周年預託牧場である。当初は生後一週間の初生牛を受け入れ、哺育を行っていたが、これは一九九〇年に中止となった。それに代わつて現在まで行われているのが、離乳後の仔牛を受け入れ人工授精した後に分娩二カ月前

まで育成するといった方法である。年間平均預託料は一頭当たり約一五万円、二〇一〇年の受託頭数は七五〇頭であった。次に農協哺育育成センターを取り上げよう。二〇〇六年に開設されたこの牧場は、旧鶴居村農協が設立を計画したものであり、主に大規模飼養農家とその



村営鶴居牧野

預託者となっている。八カ月分の預託料の総計は、一頭当たり一二万七、二〇〇円となる。

最後に村営鶴居牧野を紹介しよう。夏期受託放牧と人工授精を担当する本牧場は、一九七〇年に開設された。農協夏期放牧場同様、夏期受託放牧を行って

いるが、前述したようにそれと競合する関係にはない。放牧期間は概ね五月二十五日から十月下旬まで、二〇一〇年の受託頭数は三四九頭であった。預託料は農協夏期放牧場同様、一日一頭当たり二三〇円となっている。

### 酪農ヘルパー利用組合

本村の酪農ヘルパー利用組合は、村内の農業者によつて一九九一年に開設された。任意加入としているため、全ての酪農家が加入しているわけではないが、

二〇一〇年現在の組合員数は七七名を数え、その数は決して少なくないと言える。事務局は乳

検組合内に置かれ、村や農協は直接その運営にタッチすることはないが、毎年、助成金を提供することでその運営を支えている。

なお、ヘルパー要員は、二〇一〇年現在一二名在籍しており、そのうちの五名が専任ヘルパー、七名が繁忙期に出役する補助ヘルパーとなっている。中には五〇才代後半のベテランスタッフもいるが、その多くは二〇〇三

〇才代に該当する就農予定の農家子息または参入者で構成されている。要するにここでの作業は、農業者の労力負担の軽減に寄与するだけでなく、こうした就農予定者が酪農技術を身につける絶好の機会としても機能しているのである。

### その他

支援システムや農業生産法人に焦点を当て、その概要や実績を述べてきたが、これら以外にも村内には特筆すべき組織や取り組みが存在する。以下では、

その中から株式会社鶴居村振興公社が運営する「酪楽館」と「鶴居村めぐりねつとわーく」を紹介しよう。

前者の「酪楽館」は、鶴居産農産物を使用した加工品の開発・製造、ならびに農産加工体験の受け入れを行う施設として二〇〇一年に設立された。ここで開発された乳製品は、チーズやソフトクリームなど、枚挙にいとまがないが、その中でも「ナチュラルチーズ鶴居〜ゴールドラベル」は特別な存在であると

製品は二〇〇九年に開催された第六回「ALL JAPAN ナチュラルチーズコンテスト」で

農林水産大臣賞受賞の荣誉に輝いたからである。これにより、鶴居産生乳の品質の良さを全国にPRすることが可能になった。

後者の鶴居村めぐりねつとわーくは、村内にある農家民宿ファームレストラン、農作業体験受け入れ施設のPRを行うグループで、これらを営む五名の

農業者と三名のファームレストラン経営者によつて二〇〇四年に結成された。メンバーが営む各施設の年間利用者数は二〇一〇年現在六〇〇〜八〇〇名に及んでおり、酪楽館同様、ここでの取り組みも鶴居の魅力を外に発信する役割を果たしていると言える。

### 3. おわりに

冒頭で述べたように、鶴居管内は離農の増加テンポが緩やかであり、それゆえに耕地面積や乳牛飼養頭数が減少せずに維持されてきた。つまり、厳しい経

営環境の下においても、これまで地域農業が危機的状況に陥ることはなかったのである。それを導いたのが、本稿で紹介した機械共同利用組合、複数戸からなる農業生産法人、育成牧場、酪農ヘルパー利用組合などといった農家経営を支える組織で



鶴居村農畜産物加工体験施設「酪楽(らくらく)館」

あつた。

乳価が低迷する一方で飼料や資材価格が上昇傾向にあるなど、酪農経営を取り巻く環境はこれまで以上に厳しさを増しており、このままでは農家数の急減、ひいては地域の衰退が避けられない状況にある。だからこそ酪農

経営を支える何らかの対策の構築が酪農地帯各地区に求められているのであるが、そのモデルの一つがこれまで述べてきた鶴居管内の取り組みであることに

ついて、ここで改めて説明する必要はないだろう。

